

近世ティロールの「地域」・「境界」認識と領邦誌

佐久間 大介

【要約】 本稿では、アルプスの南北にまたがり、多数派のドイツ語系と少数派のイタリア語系住民から構成されるティロールにおいて、ドイツ語系エリートがどのように「地域」や「境界」を認識していたかを考察した。分析対象としたのは、ティロールでは一七世紀に出現し、一八世紀に活況を呈した領邦に関する地誌、すなわち領邦誌である。

一七世紀における領邦誌の成立は、ティロールを他とは異なる一つの「祖国」とする見方を前提としていた。だが、当時の領邦誌作者は、独立した聖界領であったトリエント司教領、ブリクセン司教領とティロール伯領の国制上の相違を無視できなかった。一八世紀には、ティロール伯領とトリエント、ブリクセン司教領の区別が重視されなくなり、かわって、新たな「境界」設定の基準が浮上する。ここで、ティロール内部の言語や「民族」性の違いへの言及があらわれたことは確かである。だが、ドイツ語系エリートは、産業・農業の正確な把握をより重視し、気候や植生におけるアルプスの南北の相違を、「地域」区分のもつとも重要な指標としていた。

ティロールが、外部から完全に切り離された空間とされていたわけではないことも重要である。一七・一八世紀の領邦誌作者は、ティロールが神聖ローマ帝国に属していることを当然視し、「ドイツ」の一部としてティロールを捉える認識も共有していた。一八世紀の領邦誌では、これに加え、ハプスブルク帝国という枠組みの存在感も高まったが、中央集権化に抵抗する諸身分の議論も反映された。地理的位置の特殊性を指摘することで、ハプスブルク帝国におけるティロールの重要性を強調するようになったのである。一九世紀以降に強まったドイツ語系とイタリア語系住民の対立や、第一次大戦後の分割の歴史を持つティロールでは、その「一体性」が常に強調されてきた。しかし、本稿で明らかにしたように、一つの固有の空間として領邦を把握する領邦誌においても、「地域」の複合的性格や「境界」の流動性を見ることができるのである。

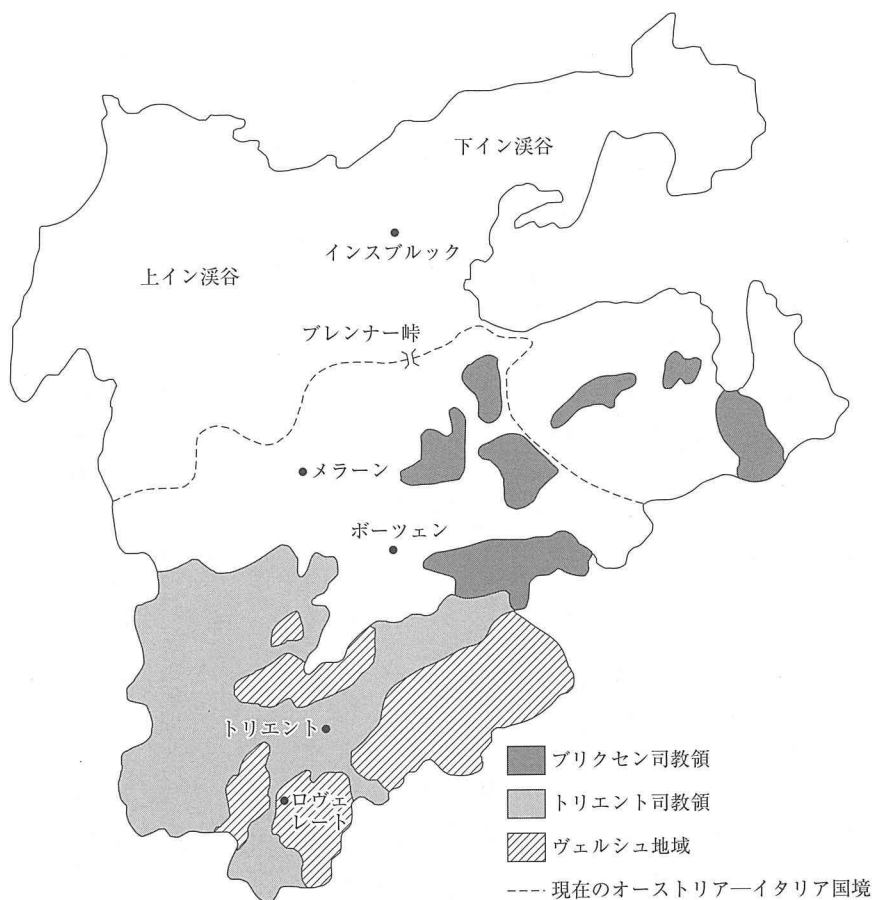
史林 九〇巻三号 二〇〇七年五月

はじめに

アルプスの南北にまたがるティロール伯領では、一九世紀後半以降、多数派のドイツ語系と少数派のイタリア語系住民の対立が強まった。この対立は、一八六一年のイタリア王国成立後に展開されたイレデンティズム（未回収地回復運動）によって激化した。イレデンティストたちは、アルプスの分水嶺であるブレンナー峠を「自然国境」とし、イタリアの「地理的一体性」を強調した。^①その主張は、ハプスブルク家の支配下にあったティロール伯領が、第一次大戦後にブレンナー峠以北はオーストリア領、以南はイタリア領へと分割されたことで実現される。だがこのとき、ドイツ語系住民が多数を占める地域までもがイタリアに編入された。その結果、ドイツ語系住民は、イタリアに併合されたドイツ語系地域を「南ティロール(Südtirol)」と呼び、これをオーストリア領ティロール州に統合するための運動を繰り広げることとなった。

こうしてひきおこされたいわゆる「南ティロール問題」は、第二次大戦後も継続した。だが、「南ティロール」に、一定の自治権が与えられ、ドイツ語とイタリア語の同格化が実現したことで、七〇年代以降、情勢は安定化に向かう。また、九〇年代以降、かつてティロール伯領を構成していた自治体は、国境を越えた地域協力を進めている。その際には、ティロールがヨーロッパの「架け橋」であったことや、「文化と言語、そしてヨーロッパの南部と中部の間の」出会いの場であったことが強調される。こうした自己定義は、ヨーロッパ統合の拡大と深化を受けて、ティロールの「地域」としてのアイデンティティを、ヨーロッパという枠組みの中で再構築しようとするものである。加えて、ティロールを複数の言語・民族の出会いの場として描くことで、民族共存のモデルケースとしてアピールする狙いもある。^②

以上のように、一九世紀以降のティロールでは、「境界」や「地域」をどのように設定するかが、常に問題となっていた。このため、ドイツ語系の研究者は、ティロールの「一体性」と「ドイツ性」を強調してきた。^③こうした姿勢は、九〇年代以降になって、ようやく見直されるようになる。その背景には、「南ティロール」情勢の安定化に加え、「境界」に関



地図 近世のティロール

(Levy, M. J., *Governance & grievance: Habsburg policy and Italian Tyrol in the eighteenth century*, Indiana, 1988, p. 9. を改変)

する研究の発展があった。
最近のヨーロッパ統合の進展や経済・環境問題の地球規模化にもかかわらず、いやむしろこのことによって、「境界」をめぐる問題が先鋭化している。その際、文化や「民族」を基準とした線引きや排除の論理が、いっそう影響力を持つようになってきている。この結果、「境界地域」に関する研究が活発化し、自然によって規定された不動のものとして「境界」を捉えるのではなく、「境界」を引く人々の認識が注目されるようになった^④。

こうした動向を念頭に、ティロールの「地域」・「境界」認識に取り組んだ最近の研究が、以下の二つである。ドイツ語系とイタリア語系の研究者の相互対話・協力を目指して、一九九二年から発刊されている雑誌『歴史と地域』は、二〇〇〇年に、「ティロール・トレンティノー ある概念の歴史」と題する特集を組んだ。ここに寄せられた諸論文は、「ティロール」や「南ティロール」などの地域名称を取りあげ、その範囲が時代を追って変動したことを示した。次に、二〇〇一年のシュタウバーの考察は、一七五〇年から一八二〇年にかけてのイタリア語系住民に焦点を合わせた。これは、ティロールを二つの「地域」から構成されると捉える傾向が、一八世紀後半以降強まったことに注意を促す。ただし、シュタウバーの分析は、イタリア語系エリートに限定されている。また、『地域と歴史』の特集は、地域概念の成立・変遷を、註を付けることなく通時的に叙述するにとどまる。実証性よりも、「地域」の枠組みを絶対視する従来の考え方を問い直し、議論を喚起することに重点を置いたためである。にもかかわらず、ティロールの地域概念に関する考察がその後はあらわれず、議論が継続されないままとなっている。

そこで本稿が注目するのは、ティロールでは一七世紀に成立し、一八世紀後半に多くの作品があらわれた領邦に関する地誌、すなわち領邦誌「*landesbeschreibung*」である。ティロールの枠組みを自明視する従来の研究は、領邦誌を、当時の状況を伝える史料か、あるいは、ティロールにおける歴史学、地理学などの学問の発展を示すものとして扱うのみであった。^⑦「地域」・「境界」認識を問題とする近年の研究でも、領邦誌が十分に考察されてきたとは言いがたい。だが、領邦誌の分析対象としての利点は、以下の二点にある。

第一に、ドイツ語で書かれていたティロールの領邦誌は、史料・情報を収集できた貴族、知識人、官僚によって担われていた。また、先行する作品を参照するのが常であり、ティロールについて研究した人物や、その著作を読み、これに関する議論に参加できたドイツ語系エリートたちは、領邦誌に記述された情報を共有していた。よって領邦誌は、当時のドイツ語系エリートの「地域」・「境界」認識を探る絶好の材料だと言える。さらに、ある空間の描写のされ方や、「地域」・

「境界」を設定する基準は、当時の知のあり方や心性を理解する手がかりとなる。^③

第二に、領邦誌の検討は、ドイツ語系エリートの「地域」・「境界」認識の変化と、その背景を明確にするのにも適している。『歴史と地域』の諸論文は、一八世紀後半以降、「ドイツのティロール」、「イタリアのティロール」、「北部ティロール」、「南部ティロール」といった概念が登場したことを指摘した。だが、当時の行政区の変動や、地図、旅行記といった性格の異なる事柄を、目的や担い手の相違に注意することなく史料としている。このため、「地域」を区分する考え方が生じた文脈が不明である。また、とりあげる史料の種類が一貫していないため、「地域」・「境界」認識の変化を系統立てて説明できていない。これに対し、一七世紀に出現し一八世紀に状況を呈した領邦誌に考察を絞ることで、ドイツ語系エリートの認識を、時代を追いながら把握することが出来る。

そこで、本稿では、第一章で、領邦誌の著者、執筆の動機、問題関心を整理し、当時のドイツ語系エリートが何に注目して「地域」を描いていたかを探る。第二章では、領邦誌が、「地域」や「境界」をどのように叙述していたのかに焦点を合わせる。以上を通じて、ある空間が一つの「地域」として観念されていく過程や、「境界」認識の多様性と流動性を明らかにしてみたい。

- ① Neginio, M., "Territorio e identità in un area di frontiera fra Otto e Novecento: il dibattito sul nome "Trentino", *Geschichte und Region / Storia e regione* (以下 GRSR) 9 (2000); Romeo, C., "Il fiume all'ombra del castello. Il concetto di "Alto Adige", GRSR 9 (2000).
- ② 佐久間大介「一八世紀後半から一九世紀初頭のティロールにおける「地域」と「境界」」「二世紀OEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書」二〇〇四年（以下、「ティロールにおける「地域」と「境界」」）、三〇七—三〇八頁。
- ③ Cole, L., "Fern von Europa? The peculiarities of Tyrolian historiography", *Zeitsgeschichte* 23 (1996).
- ④ Faber, R., Naumann, B. (Hg.), *Literatur der Grenze — Theorie der Grenze*, Würzburg, 1995. ライン河をめぐる独仏間の対立が激化した一九三〇年代に、リュシアン・フェーヴルは、ライン河とその周辺地域の歴史を扱った著作を発表した。ここでは既に、あらゆる「境界」は自然ではなく人間が設定したものだとして述べられていた。第二次大戦後にはほとんど忘れられていたこの作品が、一九九四年にドイツ語訳されたのは、「境界」をめぐる人々の認識が注目されるようになったあらわれだと言える。Febvre, L., *Der Rhein und seine Geschichte*, hg.,

übersetzt u. mit einem Nachwort von Peter Schöttler, Frankfurt-New York, 1994.

- ⑤ 本稿は註①で既にあげた論文の他に、以下を参照した。
Brandstätter, K., „Tyrol, die herrliche, gefürteste Grafschaft ist von uralten Zeiten geherrscht und auch so geschrieben...“, Zur Geschichte des Begriffes „Tirol“, GRSR 9 (2000); Heiss, H. (unter Mitarbeit von Pfeiler, G.), „Man pflegt Südtirol zu sagen und meint, damit wäre alles gesagt“. Beiträge zu einer Geschichte des Begriffes „Südtirol“, GRSR 9 (2000); Kuprian, H. J. W., „Ein rauher Alpenwind, wie der Scheidegruss Nord-Tyrols, weht aus den Felsklüften des Brenner“. Zur Geschichte des Begriffes „Nordtirol“, GRSR 9 (2000); Pallaver G., „Kopfgewalt Europäische Region Tirol. Genesis und Entwicklung eines politischen Projekts“, GRSR 9 (2000).

- ⑥ Stauber, R., *Der Zentralstaat an seinen Grenzen: administrative*

一 領邦誌の性格

(一) 領邦誌の成立

本章では、領邦誌の性格を、作者と執筆の動機・問題関心などを中心にして説明する。これを通じて、ドイツ語系エリートが、ティロールという「地域」について語る際、いかなる要素を重視していたのか、またその背後には、どのような知的潮流があったのかを考えてみたい。

一七世紀初頭に著されたヴォルケンシュタインの『ティロール年代記』^①とブルクレヒナーの『ティロールの鷲』^②は、ティロールについての総合的な情報をもりこんだ画期的な作品とされている。一方、一六七八年に出版されたブランデイス

Integration, Herrschaftswandel und politische Kultur im südlichen Alpenraum 1750-1820, Göttingen, 2001 (ネー Zentralstaat).

- ① Egger, J., *Die ältesten Geschichtsschreiber, Geographen und Altertumsforscher Tirols*, Innsbruck, 1867; Nössing, J., „Die Anfänge der modernen Tiroler Geschichtsschreibung oder das Problem mit der geschichtlichen Wahrheit“, *Der Schler* 71 (1997); Leidmair, A., „Landeskunde und Landesbeschreibung in Tirol“, *Veröffentlichungen des Tiroler Landesmuseums Ferdinandeum* 78 (1998).

- ② 空間を分割する考え方に目を向ける「ランド」の背後にある社会認識を探ろうとした有益な先行研究としては「シャルチエ・ロジエ(天野千恵子訳)『サン＝ピエール・シエネーヴ線』ノラ・ビエール編(谷川稔監訳)『記憶の場——フランス国民意識の文化』社会史 第一巻 対立』岩波書店 二〇〇一年。

の『ティロールの鷲の栄冠』^④は、先行する作品にほとんど依拠するもので、オリジナリティは少ない。しかし、これまでの領邦誌が、手稿やその写本の形で伝えられてきたのに対し、『ティロールの鷲の栄冠』は、初めて出版されたものであり、後世に与えた影響は無視できない。^⑤

以上の三作品の特徴としては、貴族的な性格の強さを指摘することが出来る。著者は、いずれもティロール貴族であり、特にヴォルケンシュタインとブランデイスは大貴族であった。このため、貴族の紋章や系図、所領について、かなりの分量が費やされている。こうした記述は、一八世紀にはほとんど見られなくなるものであった。^⑥

一七世紀の領邦誌の第二の特徴は、反中央・反君主の性格が弱いことである。ティロールは、ハプスブルク家の支配下にあったが、他のハプスブルク諸邦でも、領邦誌は執筆されていた。他領邦の領邦誌は、君主に対抗し、諸身分 *Stände* の側の主張を正当化する傾向を持っていた。その背景にあったのが、当時の領邦諸身分では、プロテスタント貴族が大きな影響力を有しており、カトリックのハプスブルク君主と対立していたことである。だが、ティロールの場合、カトリックの貴族がほとんどであったため、君主と諸身分との関係において、宗派は問題となっていない。ティロールの領邦誌が、他と比べて、君主と対立的でなかった理由としては、領邦誌の担い手や後援者の問題もあった。他の領邦の場合、諸身分の財政支援と監督の下で、領邦誌が作成されることが多かった。一方、ティロールの領邦誌作者、ブルクレヒナーとブランデイスは、君主の官僚であった。特に、ブランデイスの執筆活動は、君主の後援を受けており、実現はしなかったものの、君主の財政支援によって出版することも意図していた。ブルクレヒナーやブランデイスとは違い、ヴォルケンシュタインは君主の官僚ではなかった。だが、大貴族であった彼は、所領に引きこもって自力で研究を行っており、諸身分の側からの援助を必要としていなかった。^⑦

次に、一七世紀ティロールの領邦誌作者が、いかなる動機で、研究に取り組んでいたかを見てみよう。

領邦形成が他よりも遅れたティロールでは、ティロールのみを対象とした歴史叙述が、中世にはほとんどあらわれな

った。^⑧こうした状況の認識が、ヴォルケンシュタインの出発点となっていた。ヴォルケンシュタインは、『ティロール年代記』執筆の理由を、「我が愛する祖国 Vaterland」を称えるためであると言う。その際には、ほとんどすべての王国や領邦が自らの年代記や歴史書を持っていること、これに対してティロールは、他に比べても多くの利点があるにもかかわらず、年代記が書かれていないことを指摘していた。^⑨なお、ブランディスも同様に、ティロールを「祖国」と呼んでいる。^⑩ブルクレヒナーの著作には、「祖国」という表現はあらわれない。しかし、ティロールを他とは区別される空間として描く姿勢は明確である。ブルクレヒナーは、多くのティロール地図を作成したことで知られている。一六・一七世紀にアルプス以北で作成されたティロール地図においては、通常、領邦間の境界線が描かれることはなかった。だが、ブルクレヒナーが一六〇八年に作成した地図は、ティロールの輪郭が明確に線引きされている。彼が地図作成に取り組んだのは、隣接するザルツブルクやヴェネツィアとの境界問題についての協議に、官僚として関わったことを契機としている。また、一六〇八年の地図は、『ティロールの鷲』の原型となった作品の付録として作られたものであった。^⑪

以上から明らかなように、領邦誌の成立は、領邦を他とは区別される一つの「祖国」と捉える認識を前提としたものであった。

(二) 領邦誌の隆盛と目的の多様化

一七世紀に登場した領邦誌は、一八世紀には最盛期を迎え、多くの作品が著された。これらは、君主への報告書として作成されたものと、ティロールの状況を内外に伝えるために出版されたものの二つに大別される。

前者のタイプに属するものとしては、一七二二年頃に書かれた『ティロールのラントシャフトの所見』^⑫、一七六〇年頃の『ティロール伯領誌』^⑬、そして、一七七九年頃の『ティロール誌』^⑭があげられる。以上は、いずれも君主への報告書として書かれたものであるが、その論調は、執筆者の立場を反映して、相違が生じていた。ラントシャフトとは、領邦議会

などの機関に参加する特権を持つ身分集団のことである。すなわち、『ラントシャフトの所見』は、ティロールの状況を君主に伝え、それに応じた統治を君主に求めるために、諸身分が作成したものであった。このため、ティロールの領邦特権を列挙し、その維持を要求する嘆願書としての性格が強い。一方、一七六〇年頃の『ティロール伯領誌』は、チエスキというティロール貴族の手によるものと推定される。彼は、君主の官僚として勤務していた。^⑮また、後世の文書館員によれば、一七七九年頃の『ティロール誌』は、皇帝ヨーゼフ二世に提出するために、ある軍人によって作成された。したがって、『ティロール伯領誌』と『ティロール誌』は、君主の中央集権的政策に対しても好意的な評価を下していた。

ただし、以上の一八世紀の領邦誌は、国制、税制、軍制、そして産業などといった、領邦統治・行政に必要な情報に重心を置く点で共通していた。その理由としては、これらが、君主に提出するという実用的な動機で作成されたものであること、また、一八世紀には、国庫主義 *Kameralismus* や統計学が流行したことがある。ドイツ版重商主義とも説明される国庫主義は、国内の産業・農業の振興によって国庫の充実を図る。また、人口の増大は、国力に直結すると見なされた。こうした国庫主義の思想と関連して、統計学も発展した。この結果、当時の官僚や学者は、人口や産業、農業をより正確に、できれば数値に基づいて把握することに重点を置くようになった。^⑯一八世紀のティロール領邦誌でも、人口、農工業、通商に関する具体的な記述が増加している。特に、一七六〇年頃の『ティロール伯領誌』は、人口を記載したはじめての領邦誌であった。以上のように、具体的・実用的な描写が行われている点では、ティロールを単純に称揚することに終始していた一七世紀の作品とは明確な対照を成していた。^⑰

次に、出版を前提とした第二のタイプの領邦誌を見てみよう。より広範な読者層を対象とする領邦誌の出現は、当時のエリートの知的潮流を背景としている。一八世紀前半のティロールでは、学問に関心を持つエリートたちの交流の結節点が生まれた。それが、大貴族、聖職者、教養人による私的なサークルとして、主都インスブルックで結成されたアカデミーである。会合では、メンバーが自らの研究成果について報告を行ったが、その内容の大部分は、ティロールの歴史、

地理、文学に関するものが占めていた。^⑮ よって、このアカデミーの成立と活動は、ティロールに対するエリートに関心の高まりを示すものと言える。

ただし、ティロール、ないしはそのドイツ語系地域に限定した文脈で、このアカデミーの性格を定義することはできない。一八世紀中盤には、ティロールのイタリア語系地域の中心都市ロヴェレートでも、同様のアカデミーが設立された。ロヴェレートとインスブルックのアカデミーには盛んな交流があり、お互いに会員も共有していた。^⑯ また、ハプスブルク帝国の初期啓蒙主義におけるイタリアからの影響を重視したズラビンガーは、イタリアの学者ムラトリーと密接な関係があった機関として、ザルツブルクやモラヴィアとともに、インスブルックのアカデミーをとりあげている。^⑰ さらに注目すべきは、会合での発表が、ラテン語で行われるのが通例だったことである。^⑱

以上から、当時のヨーロッパにおける同種のアカデミーがそうであったように、インスブルックのアカデミーが、領邦、国家、「民族」の枠を超えたネットワークを維持しており、国際的、コスモポリタ的な性格を持っていたことがわかる。つまり、当時の知識人に共有される「文芸共和国」に、インスブルックのアカデミーも参加していたのである。^⑲ ティロールという「地域」に対する関心は、こうした「境界」を越えるネットワークの中から生まれたと考えることもできる。

それでは、このアカデミーのメンバーは、どういった問題関心から、ティロールに関する研究に取り組んでいたのだろうか。いくつかの図書館で勤務するかたわら、インスブルックのアカデミーでも主要な役割を果たしていたアントン・ロシユマンは、自らの研究の目的を、「祖国 *Patria* (= *Vaterland*)」に益するためと述べていた。^⑳ 一七四〇年には、『ティロール伯領小誌』と題する領邦誌を発表したが、執筆の目的として、従来の領邦誌の多くが「外国人 *Auslander*」の手になるもので、正確性に欠けていたことをあげている。^㉑ すなわち、ロシユマンが領邦誌に取り組んだ意図は、ティロールの状況を内外に正確に伝えることにあったのである。

アントンの息子カッシアンも、父と同様、ティロールに関する研究に従事した。そして、歴史に重点を置きつつも、地

理や植生なども取り扱った二つの領邦誌を出版している。まず、一七七八年の『ティロール伯領史』の目的は、ハプスブルク諸邦で学ぶ若者が使用するためと、副題で述べている。^{②④}一七九二年に第一巻、一八〇三年に第二巻が出版された『ティロール史』は、『ドイツの帝国史』のために、まず個々の「地方 Provinz」の歴史を書く必要があるとして、ティロールを取りあげていた。^{②⑦}いずれにせよ、ロシユマン親子の作品は、ティロール外の読者をも視野に入れたものだと言えるだろう。

一七世紀における領邦誌の成立は、ティロールという領邦を、他とは異なる一つの単位として捉える認識が出現したことを意味していた。ただし、領邦誌の担い手は、貴族に限定されており、貴族の紋章や系図、所領に記述の重点が置かれていた。また、出版されたものは、ブランデイスのものだけである。つまり、領邦誌の読者層は、限られたものにとどまっていた。だが、多くの作品があらわれた一八世紀には、領邦誌の性格も変化する。まず、君主への報告書として作成されたものは、実用的な問題関心に基づいていた。このため、産業や人口など、具体的なデータが増加した。また、出版された領邦誌は、より広範な読者層を対象としたものであり、これには、ティロール外部の読者も含まれていた。

- ① この作品は、『南ティロール領邦誌』という題名で、一九三六年に初めて出版された。だが、作者自身は「これを『ティロール年代記』と呼んでいるため、本稿もこれにしたがう。出版の際には、編者による解説や、ヴォルケンシュタインが『年代記』の構成や意図について記した手紙も付け加えられた。本稿の記述は、これらも参照しつつ。Wolfenstein, M. S. v., *Landesbeschreibung von Südtirol*, Verlag um 1600, erstmals aus den Handschriften hg. v. einer Arbeitsgemeinschaft von Innsbrucker Historikern, Innsbruck, 1936.
- ② Tiroler Landesmuseum Ferdinandeum (以下、TLMF), Ferdinandsbibliothek (以下、FB) 2092-2101, M. Burglechner's Tirolischen Adlers, Blutrübener in der Zeit, 以下も参照。Ranger, L.,
- ③ "Matthias Burglechner", *Forschungen und Mitteilungen zur Geschichte Tirols und Vorarlbergs* 3 (1906), 4 (1907).
- ④ Egger, *op. cit.*, S. 16-43; Nössing, *op. cit.*, S. 365; Leidlmair, *op. cit.*, S. 6-7.
- ⑤ Brandis, F. A. v., *Des Tirolischen Adlers Immergründes Ehren-Kränzel* L. J. Bolzen, 1678, トロント・ユニバーシティ Egger, *op. cit.*, S. 60-61 も参照。
- ⑥ しかも、ブランデイスの作品は、一七五九年に以下のタイトルで再販された。^{②⑧} Brandis, *Kurze Geschichte der gefürsteten Grafschaft Tyrol, von Noe dem Patriarchen an, durch zehn Beherrschungen, bis auf die glorwürdigsten Regierungen der Erzherzoge von Oesterreich*, 2 Teile,

- ②③ アントン・ロシュマンの研究分野は、歴史、地理、美術、自然科学などと広範囲に及ぶ。特に、ティロールの古代学の父であり、明らかに「祖国 Vaterland」の歴史学と地理学に多大な貢献をしたという点で、後世の評価は一致している。彼につづいては、以下を参照。Auer, *op. cit.*; Subaric, L., *Historia literaria Tyrolensis*. Anton Roschmanns *Geschichte der Gelehrsamkeit in Tirol*, Diss., Innsbruck 2001, S. 12-23.
- ②④ Auer, *op. cit.*, S. 78. など 括弧内の補足は筆者による。以下の引用文中の括弧も同様。
- ②⑤ Roschmann, A., *Kurze Beschreibung der Fürstlichen Grafschaft Tirol*,

- verfertigt von Anton Roschmann J. U. L. der Röm. Kayserl. und Königl. Cathol. Majestät Oberösterreichischem Universitäts-Notario*, Innsbruck, 1740 (以下、*Kurze Beschreibung*), S. 3-4.
- ②⑥ Roschmann, K. A., *Geschichte der geistlichen Grafschaft Tirol, zum Gebrauche der studierenden Jugend in den k. k. Staaten*, Innsbruck, 1778 (以下、*Grafschaft Tirol*).
- ②⑦ Roschmann, K. A., *Geschichte von Tirol* (以下、*Tirol*), 2 Teile, Wien, 1792-1803.

二 「地域」・「境界」認識

前章では、領邦誌の概略を整理し、記述の重点や問題関心が時代によって変化したことを明らかにした。以上を踏まえ、たうえで、本章では、領邦誌がティロールという「地域」や、その内外の「境界」をどのように描き出していたかを考察する。

(一) ティロール内部の境界

前章で見たように、領邦誌は、領邦を単位とする「地域」意識を前提に作成されていた。だが、どのように「地域」を設定しても、その内部に多様性が存在し、必然的に「境界」を抱え込んでしまう。特にティロールでは、一九世紀以降、ドイツ語系とイタリア語系の対立の中で、「境界」をめぐる問題が先鋭化した。それでは、一七・一八世紀の領邦誌は、ティロール内部の「境界」を、どのように認識していたのだろうか。

ここでまず問題となるのは、一八〇三年にティロール伯領に統合されるまでは、ティロール伯領と同盟を結びつつも独

立した聖界領であったトリエント司教領とブリクセン司教領（以下、両司教領と略記）である。特に、イタリア語系住民が多数を占めるトリエント司教領は、一九世紀後半以降のドイツ語系とイタリア語系住民の議論の争点となっていた。イタリア側の視点では、トリエント司教領は、「ドイツ化」の圧力に抵抗したイタリアの防塞と把握されていた。^①これに対し、二〇世紀前半に活躍し、ティロールの「ドイツ性」と「一体性」を主張し続けていたドイツ語系の研究者シュトルツは、両司教領が神聖ローマ帝国の領土であったことを理由に、ティロール伯領と両司教領が全体として「ドイツ」に帰属していたと主張した。また、両司教領のティロールへの帰属を裏付けけるものとして、一七世紀の領邦誌にも言及している。^②

前章で確認したように、一七世紀の領邦誌は、ティロールを「祖国」と見なしていた。この「祖国」には、両司教領が含まれていることは確かである。いずれの領邦誌も、両司教領について記述しているからである。また、ヴォルケンシュタインは、ティロール伯領が「帝国諸侯たる二つの司教領トリエントとブリクセン」を保有しているとし、司教領について記述することは、「祖国」に益し、その名誉を高める作業の一環であるとの認識を示している。^③

ただし、両司教領についての説明が、特別に章を設けて行われていたことにも注意する必要がある。^④その際、ヴォルケンシュタインは、両司教領についても記述する理由を、その領土がティロール伯領の「保護と庇護 *Schutz und Schirm*」の下にあるためであると、わざわざ断らねばならなかった。^⑤ブルクレヒナーは、君主がトリエント司教領にいかに恩恵を与えてきたか説明する。^⑥ブランデイスは、ティロール伯が両司教領の「保護権 *Vogtei*」を保有していること、両司教領がティロールの領邦議会に参加していることを指摘して、ティロール伯領と両司教領の結びつきを強調する。^⑦こうした記述のパターンや内容は、両司教領の自立性を強調する考え方があったことを、筆者が意識していたことから生じたものだろう。少なくとも、当時の観念では、ティロール伯領と両司教領の「一体性」が、自明ではなかったのである。

では、言語や「民族」の多様性は、どのように記述されていたのだろうか。一六世紀初頭にティロール伯領に編入されたヴェルシュ地域と呼ばれる場所と、トリエント司教領は、イタリア語系住民が多数を占める。だが、ブルクレヒナーや

ブランデイスは、言語の相違についてまったく触れない。これに対し、ヴォルケンシュタインは、個々の裁判区に関する記述の中で、住民の言語、風習、法慣習などについて言及した^⑧。だが、一九世紀以降、その位置が論争の焦点となった「言語境界」については、言及しない。すなわち、言語を基準として、ティロール内の「地域」を区分することはなかったのである。

以上のように、一七世紀に重視された「境界」は、言語ではなく、ティロール伯領と両司教領の間の国制上の相違に基づいていた。だが、一七四〇年のアントン・ロシュマンの『ティロール伯領小誌』では、「この領邦には、二つの帝国諸侯領、すなわちトリエント司教領とブリクセン司教領が存在する」と述べられる。そして、一七世紀の領邦誌と違い、両司教領に対して別個の章が設けられることはなかった。両司教領をティロールの単なる一部とする彼の認識は、一七四二年の『ティロール文学史』^⑩にもあらわれる。ティロールの文学や美術の歴史を論じたこの作品では、ティロール伯領だけでなく、両司教領出身の芸術家や文筆家もとりあげられた。そのうえ、「我らがトリエント [Tridentum nostrum]」^⑪という文言も見られる。

ティロール伯領と両司教領の間の「境界」を重視しないのは、ロシュマンに限られたことではなかった。同時代の他の領邦誌でも、両司教領が別個に取り扱われることは、ほとんどなくなった^⑫。これは、両司教領のティロール伯領への統合が進展したことを反映するものだろう^⑬。

では、言語についての記述はどうなっていたのだろうか。『ティロール伯領小誌』では、ティロールにおいて、ドイツ語とイタリア語が用いられていることは触れられる^⑭。だが、これらがどこで話されているかについての具体的な記述はなく、「言語境界」が存在するとの認識は見られない。「文芸共和国」の住人としてラテン語を駆使し、それによって、ロヴェエリートのアカデミーのイタリア語系エリートとも交流していたアントン・ロシュマンにとって、言語や文化の違いは、大きな意味を持たなかったと考えられる^⑮。

もつとも、特に一八世紀後半には、ドイツ語系とイタリア語系の住民を区別する叙述が出現したことは確かである。

真のローマ・カトリックの信仰は、何百年も前から、領邦全体で花開いている。とりわけドイツのティロールでは、人々 *Volck* は、信心や旧来の慣習にしたがっている。一方、ヴェルシュラント *Welschland* に面して居住する人々 *Volcker* の道徳は、より劣っている。もつとも、その才能、理性、認識力は、より深く大きい。^⑩

以上は、一七六〇年頃の『ティロール伯領誌』からの引用である。引用文にあらわれる「ヴェルシュ」とは、一般には「ロマンス(語)の」という形容詞であるが、ティロールでは、「イタリア(語)の」という意味で用いられていた。したがって、『ティロール伯領誌』は、ドイツ語系とイタリア語系の住民を区別するものだと言える。しかしながら、当時の領邦誌の中で、こうした見方をとるのは『ティロール伯領誌』のみであった。^⑪ それ以外の作品では、言語とは違った指標によって、「地域」区分が行われていた。

前章では、一八世紀の領邦誌が、国庫主義や統計学が流行した当時の風潮にしたがって、域内の農業、産業や人口の正確な把握を目指していたことを指摘した。農業的生産力や産業の特徴を述べる際には、気候や植生といった要素が重要となる。その結果、一八世紀の領邦誌には、気候や植生を基準にして、アルプスの南北を区分する見解が登場した。

例えば、一七七九年頃の『ティロール誌』は、「北部ティロール *das nördliche Tyrol*」では農耕と牧畜が、「南部ティロール *das südliche Tyrol*」ではワイン製造業と養蚕業が、主要な生計手段になっていると説明した。^⑫ ティロールの場合、ブドウや桑を栽培できるのは、アルプス以南に限られているため、産業や植生を基準に、アルプスを南北の「境界」とする認識が示されていると考えられる。植生を指標とするのは、カッシアン・ロシュマンが、一七七八年に発表した『ティロール伯領史』も同様である。この作品は、ティロールを「北部 *der nördliche Landheil*」と「南部 *der südliche Landheil*」に区分する。その基準は、「肥沃さ、あるいはブドウや桑の生長、そして優れた果実の産出」であり、これにしたがえば、アルプスの分水嶺であるブレンナー峠以南は「南部」に属すると明確に述べている。^⑬

アルプスを「境界」とする考え方は、この時期に始めて登場したわけではない。古代の著述家たちは、アルプスを北方の野蛮人に対する「防壁」と見なしていた。このことがペトラルカによって再発見されて以降、「防壁」としてのアルプスという認識は、イタリアの人文主義者の間に広まった。一九世紀後半以降に展開されたイレデンティズムにおいては、こうした過去の著作が利用されたのに対し、ドイツ語系の側は、ブレンナーを「境界」とする考え方を必死に否定しようとした。^{②①}しかしながら、一八世紀後半のドイツ語系エリートは、イタリアの人文主義者たちとは違った観点から、すなわち植生に着目することで、ブレンナーの「境界」としての機能を見出していたのである。

以上の考察から、ティロールを他とは異なる一つの単位として描く領邦誌でさえも、内部の「境界」を認識していたこと、また、その基準が、時代によって変化したことが明らかとなった。だが、「地域」・「境界」認識を問題とする場合、ティロールという「地域」が、その外部との関係で、どのように位置づけられていたのかを見る必要がある。よって次節では、「ドイツ」やハプスブルク帝国といったより広い枠組みについて、領邦誌がいかに叙述しているのかを検討する。

（二）「ドイツ」やハプスブルク帝国における位置づけ

一七世紀の領邦誌を見ると、作者が、ティロールを「ドイツ」の一部と見なしていたことが明白となる。ヴォルケンシユタインは、「我が祖先、古ドイツ人」と記述した。さらに、ローマ帝国崩壊後、ティロールはドイツとバイエルンに帰属したため、多くの地域でドイツ語が用いられていると説明する。^{②②}ブルクレヒナーは、「ドイツ国民の帝国（＝神聖ローマ帝国）において、ティロール伯領よりも南にある地方 Provinz は存在しない」と記す。ブランデイスも、「我らが太古のドイツの祖先 Unsere Uralte Teutsche Vorfahren」と表現し、ドイツ語を「母語」と呼んでいた。^{②③}

ティロールを「ドイツ」の一部とするのは、一八世紀も同様である。カッシアン・ロシュマンは、一七九二年の『ティロール史』で、「ドイツの個々の地方 Provinz の歴史叙述が日の目を見ない限り、ドイツの帝国史は望むべくもない」と

述べている。^{②⑤}

ティロールの領邦誌における以上の「ドイツ」認識においては、神聖ローマ帝国という「ドイツの帝国」の枠組みと、「民族」や文化に基づいた「ドイツ」とのずれがほとんど問題とされていない。近世のヨーロッパにおける「境界」概念に関する見取り図を示したメデイックは、ドイツの特徴として、政治的分裂状態のために、言語や文化という要素が「ドイツ」の紐帯として重視されたことをあげている。^{②⑥} また、シュタウバーは、「ドイツ」と「イタリア」の境界に関する人文主義者たちの見解を整理している。それによると、ドイツの人文主義者は、「ドイツ」という枠組みとドイツ語圏を同一視する傾向があった。一方、ティロールのイタリア語系エリートは、一八世紀後半になると、自らがイタリア文化圏に属しているとの意識を強め、ドイツ語系地域との差異を強調し始める。ただし、この時点では、「イタリア」という政治的枠組みは存在していなかった。このため、イタリア語系エリートは、政治的発言権の拡大や、場合によっては、ティロールからの分離さえ要求するものの、ハプスブルク家の支配を否定することはなかった。そこで生まれたのが、「政治」と「自然」を区別する考え方である。ここでは、言語、民族、慣習、歴史などが、「自然」という概念によって一括される。そして、自らの「地域」は、「政治」的にはティロールに帰属するものの、「自然」においては「イタリア」の一部であると説明することで、ドイツ語系地域との文化的相違とティロールへの帰属を両立させようとしたのである。^{②⑦}

だが、ティロールのドイツ語系エリートの場合、神聖ローマ帝国への帰属は、文化的な葛藤を生じさせるものではなかった。また、前節で明らかにしたように、一七世紀の領邦誌は、「民族」や言語を基準に「地域」を設定していなかった。一八世紀の領邦誌においても、イタリア語系地域の存在に目が向けられることは稀であった。ティロールで優位にあった彼らにとって、イタリア語系地域の存在も、なんら重要視すべきものではなかったのだろう。したがって、神聖ローマ帝国を「ドイツ」と同一視し、ティロール全体をその一部とすることは、特に困難なことではなかったのだと考えられる。では、ハプスブルク帝国という枠組みについてはどうだったのだろうか。

前章で見たように、ティロールの領邦誌は、反君主・反中央的なものではなかった。ただし、君主を同じくする諸領邦の複合体であったハプスブルク帝国で、国家統合の動きが本格化するのには、一八世紀以降のことである。このため、一七世紀の領邦誌は、ハプスブルク家の支配下にある他の領邦については言及していなかった。また、ハプスブルク帝国という枠組みの中で、ティロールの特徴を定義するような主張も見られない。

これに対し、一八世紀の領邦誌には、ハプスブルク帝国の存在を前提とした言説が出現する。これについては、まず、カッシアン・ロシュマンの一七七八年の『ティロール伯領史』が、ハプスブルク諸邦で学ぶ若者たちのために書かれたものであったことが思い起こされる。この作品では、「その祖国 Vaterland によそ者 Fremdling であることは、不適切で、しばしば有害でさえあるのだ。特に君たち、若き同胞たち Miltbürger にとっては！」^②と力説された。また、ティロールの地理的位置を、「リエンツをのぞいては、諸外国 Fremde Staaten に取り囲まれている」と説明した。

ハプスブルク帝国の存在感の高まりは、一八世紀の領邦誌が、ティロールを、「オーストリアの心臓」、「オーストリア世襲諸領の砦」、「ドイツとイタリアの鍵」と呼ぶようになったことからわかる。これらの語句は、一六世紀以降に、ハプスブルク君主がティロールを呼ぶ際に用いたことに由来する。また、一八世紀にこれらの用語を使うのは、領邦誌に限られていたわけではなかった。当時のティロール諸身分は、君主との協議の際に、こうした表現を頻繁に持ち出していた。ティロールの軍制史家シェーナツハは、君主側がこれらの語を用いているのは、財政的・軍事的貢献を諸身分に要求する際であったことを指摘する。ティロールの軍事的地位の重要性を強調することで、諸身分に負担を納得させようとしたのである。ところが、一八世紀には、諸身分の側が、こうした表現を使うようになった。その背景にあったのが、ティロール独自の軍制を廃止して他領邦のシステムに統一化するなど、いつそうの軍事的負担を求める中央からの圧力が強まったことである。これに対し、諸身分は、ティロールの武装・防衛能力を強調することで、従来の制度の有効性を訴えようとした。その中で、「オーストリアの心臓」といった用語も、当初の文脈が読みかえられ、ティロールの果たしてきた

軍事的役割と、その役割を君主自身が称賛してきたことを示すものとして、多用されるようになったのである。^②

以上で述べた軍制の画一化に対する抵抗を通じて、「オーストリアの心臓」をはじめとする表現は、当時のドイツ語系エリートに周知のものとなったと推測される。これらの用語が領邦誌にあらわれるようになった原因としては、さらに以下の二点も指摘できる。

第一に、これらの表現は、ティロールが他の領邦よりも多くの特権を保持している根拠とされていた。『ティロールのラントシヤフトの所見』の冒頭では、ティロールの地政学的な重要性が、以下のように説明される。

ティロールは、オーストリアの他の世襲王国や地方から遠く離れており、強力で危険な外国の勢力に取り囲まれている。…領邦全体が、高い山々で囲まれ、自然によって築かれた城砦を成す。このため、皇帝マクシミリアン一世によって、神聖ローマ帝国の心臓かつイタリアに至る唯一の橋と、そして、フェルディナント一世によって、オーストリア世襲諸領の砦と名づけられた。そして、これを失えば、ドイツの世襲諸領を維持することは困難で、逆に、これを保持する限り、他を征服することは容易であるとしたのである。こうした状況、すなわち遠く離れていることや、危険な隣国にはさまれていることのために、オーストリア家（ハプスブルク家）は、ティロールを他の世襲諸領とは区別して扱ってきたのである。^③

君主への請願を列挙した『所見』の最後でも、危険な外部の勢力に囲まれていることや、にもかかわらず、「ドイツ帝国の心臓」、「オーストリア世襲諸領の砦」としての役割を果たしてきたことが繰り返される。^④『所見』は、ティロールの旧来の慣習・特権を列挙し、その維持を君主に要望することを目的として作成されており、このことから、「心臓」や「砦」としての重要性が、特権の理由とされていることが確認できる。

地理的位置が強調される第二の理由は、商業的利益に関するものである。当時の領邦誌の多くは、ティロールを、「ドイツ」と「イタリア」を結ぶものとして位置づけていた。例えば、カッシアン・ロシュマンの『ティロール史』は、「ドイツ」の個々の地方の歴史を明らかにしようとする作業において、特にティロールに注目するのは、「ドイツをイタリア

に結びつける結節点」であるためと説明していた。^③

「ドイツ」と「イタリア」を結ぶ機能に注目する言説は、ティロールのアイデンティティをめぐる後世の議論においても、繰り返し出現する。例えば、ティロールの一体性を示すことに努めたシュトルツは、元来はスイスを言い表していた「横断路国家 Paßland」という概念を利用した。つまり、ティロールの地理的性質を、南から北までの交通路をコントロールするものと定義することで、その「一体性」を強調しようとしたのである。^④ また、はじめにで触れたように、かつてのティロールを「境界地域」としてアピールしようとする動きが、近年では盛んになっている。だが、一八世紀の領邦誌に見られる、「ドイツ」と「イタリア」をつなぐ役割を強調する言説は、後世の議論とは違った観点から出現したものであった。

既に述べたように、一八世紀には国庫主義的な考え方が優勢となった。これにしたがい、ハプスブルク帝国でも、輸出の奨励と、関税の引き上げによる輸入の抑制が図られた。しかし、アルプスを縦断する通商路からの収益に頼ってきたティロールにとって、こうした政策は大きな不利益をもたらす。また、この時代には、ハプスブルク領で唯一の港とも言えるトリエステに、自由港の特権が与えられた。これによって、トリエステにつながる通商路が成長する一方、ティロールの南北を通過する商品の流通量が減少した。^⑤

一七六〇年の『ティロール伯領誌』は、「ティロールは、神聖ローマ帝国全体からヴェルシュラントへと向かう商品の通路である」と述べる。そして、トリエステの成長によって、ティロールを通過する交易が打撃を受けたことに懸念を表明した。^⑥ また、「心臓」や「鍵」といった表現で、地理的重要性を際立たせる言説もあらわれる。

高い山脈に囲まれ、ドイツとヴェルシュラントの間に位置するという有利な立地条件は、ティロールをあらゆる外敵の侵入から守るだけでなく、両国間の通商路を開くものでもある。しかし、この通商路は、外部の諸都市の成長によって完全な崩壊の危機にある。同時に、この領邦は、オーストリア領のヴェルシュ諸国と、ドイツ諸国を結びつける唯一のものである。したがって、その

収入高ではなく、上で述べたより重要な理由のために、主要な世襲諸領の一つと見なされてきた。実際、ラントシャフトの文書によれば、皇帝カール五世は、当伯領をドイツとヴェルシュラントの鍵と、そして、フェルディナント一世は、オーストリアの心臓と名づけたのである。^②

この史料に見られるように、「ドイツ」と「イタリア」の間の「通路」であるという言説は、通商路としてのティローの独自性を強調する中で成長したものであった。^③

一七世紀の領邦誌は、ティロール伯領と両司教領の間の国制上の差異を無視できなかった。一八世紀には、両司教領のティロール伯領への統合が進展したことで、両者の「境界」は重視されなくなる。これにかわって出現した、「境界」設定の新たな基準の一つが言語であるが、これが唯一かつ絶対の指標ではなかった。国庫主義的な観点に基づいて書かれた領邦誌は、収入に直結する、農業、工業、人口の状態を正確に把握することを重視していた。この結果、気候や植生を基準にして、ティロールをアルプスの南と北で区分する考え方が成長したのである。

次に、ティロールと外部との関係であるが、ティロールを「ドイツ」の一部とする認識は、既に一七世紀からあらわれていた。これに対し、ハプスブルク帝国への帰属が語られるようになるのは、一八世紀以降である。これと同時に、ティロールがハプスブルク帝国や神聖ローマ帝国において特別な位置にあるという主張も登場した。以上のように、一八世紀には、外部との関係の中でティロールの特徴を際立たせるような言説が発展した。背景としては、第一に、ハプスブルク帝国の中央集権化が進む中で、これに対抗する論理が必要となったこと、第二に、領邦誌が、ティロール外をも含む、より多くの読者に向けて書かれるようになったことがあるだろう。

- ① Nequinio, *op. cit.*, pp. 60-61.
② ティロールの文書館の館長も務めたシュトルツの著作は、膨大な史

料を用いており、扱った対象も広範囲にわたるため、現在でも参照されることが多い。だが、シュトルツの最大の目的は、アルプスを「自

- 然国境」と考えるイタリア側に反論し、「南ティロール」併合の不当性を訴えることにあった。それをもっとも明確に示すのが、一九二七年から三四年にかけて出版された『南ティロールにおけるドイツ性の拡大』である。ここでは、ティロール、ないしは神聖ローマ帝国への両司教領の帰属が強調されるだけではなかった。アルプスの南側にドイツ人が入植することで、ドイツ語、ドイツの地名、ドイツの慣習などの「ドイツ性」が拡大する様相が描写されたのである。Stolz, *Ausbreitung des Deutschen in Südtirol im Lichte der Urkunden* (以下「Ausbreitung」, 4 Bde. in 5 Teilen, München-Berlin, 1927-34. シュトルツは「ティロールの「ドイツ性」・「一体性」を強調する際、一七世紀の領邦誌を恣意的に利用するが、特に高く評価するのはヴォルケンシュタインのものである。ヴォルケンシュタインの作品の出版作業の中心となり、さらには、その意義についての解説も付け加えたのである。）」でも「ヴォルケンシュタインが両司教領を取り扱っていることを強調している」。Stolz, "Die Bedeutung des Werkes des Marx Sticht von Wolkenstein", in: Wolkenstein, *op. cit.* (以下「Die Bedeutung」), S. 18-19.
- ③ Wolkenstein, *op. cit.*, S. 39, 69-70.
 - ④ FB 2094, Fol. 598-667; Wolkenstein, *op. cit.*, S. 67-157; Brandis, *op. cit.*, Anderer Thail, S. 1-8.
 - ⑤ Wolkenstein, *op. cit.*, S. 69-70.
 - ⑥ FB 2094, Fol. 619-622.
 - ⑦ Brandis, *op. cit.*, Anderer Thail, S. 1-6.
 - ⑧ ヴォルケンシュタインの領邦誌をシュトルツが評価した理由は「ここにも存在する。シュトルツは、イタリアに併合された「南ティロール」において、ドイツ語が古くから通用していたことを示すものとして「年代記」が意義づけられていた。Stolz, "Die Bedeutung", S. 15-18.
- だが、「年代記」の以下の箇所では、複数の裁判区でイタリア語が話されており、ドイツ語とイタリア語が混在する場所もあったことが記されている。すなわち、この史料は、ティロールの「ドイツ性」や「一体性」ではなく、むしろ言語や慣習における多様性を示すものとして解釈すべきであろう。Wolkenstein, *op. cit.*, S. 65, 193-194, 200, 205, 208, 212, 215.
- ⑨ Roschmann, A., *Kurze Beschreibung*, S. 17.
 - ⑩ Subaric, *op. cit.*
 - ⑪ *Ibid.*, S. 41.
 - ⑫ 本稿でとりあげる一八世紀の領邦誌で、両司教領に対して章を設けているのは「一七二一年の「ティロールのラントシャフトの所見」だけである。FB 2706, Fol. 17-20.
 - ⑬ 一八世紀のトリエント司教領とティロール伯領の関係については、Bellabarba, M., "Trient", in: *Handwörterbuch zur deutschen Rechtsgeschichte*, Bd. 5, Berlin, 1992, S. 350. なお、ティロール伯領と両司教領を一体視する傾向は、当時の地図にも見ることができ、一八世紀前半にティロール外で作成された地図の多くは「ティロール伯領と両司教領の間に線を引いていた。これらの地図は、「ティロール伯領。ならびにトリエント司教領とフリクセン司教領」というタイトルを冠し、地図が示す地域の政治的な複合性に配慮する。ところが、一八世紀後半にティロール人が作った二つの地図は、完全に新しい傾向を示していた。その地図の一つはシュベルゲス、二つ目はアニツとヒューバーの手によるもので、特に後者は、現在の基準から見ても、きわめて正確な測量に基づくものであると評価されている。この二つの地図は、領邦の輪郭を正確に描くことに、重点を置いている。一方で、両司教領は「統一的な領域として描かれることはなかったのである。Edlinger, M. (Hg.), *Atlas Tyrolensis: die großen Kartographen aus*

Oberpfus/Tirol: Peter Anich (1793-1766), Blasius Hueber (1735-1814), Anton Kirchbner (1750-1881), Innsbruck-Bozen, 1981; Smauer, Zentralstaat, S. 26-27.

⑭ Roschmann, A., *Kurze Beschreibung*, S. 6-7.

⑮ こうしたロシュマンの認識は、当時のイタリア語系エリートにも共有されていた。同時代のイタリア語系知識人によって執筆された『ティロル文献集成』は、ロシュマンの『ティロル文学史』と類似したもので、イタリア語系による作品も「ティロルの文献」として取り扱っている。しかも、この本の構想を知った他のイタリア語系知識人たちは、ティロルのドイツ語系の読者のことも考慮し、ラテン語で発表するべきであると著者に助言したのである。にもかかわらず、『ティロル文献集成』はイタリア語で書かれたが、ドイツ語系にもイタリア語系にも、この著作は好意的に迎えられる。もっとも、一八世紀末に、『ティロル文献集成』と同様の作品が企画された際には、既に雰囲気が変わっていた。イタリア語系知識人たちの多くは、イタリア語系地域が生み出した文筆家たちを「ティロル文学」の枠組みに含めることを、我慢ならないことと批判したのである。こうした強い批判を受けて、新たに『ティロル文献集成』を執筆するところ計画は実現しなかった。Subaric, *op. cit.*, S. 7-10.

⑯ Dip. 1194/III, S. 9.

⑰ 『ティロル伯領誌』が、イタリア語系住民に目を向ける理由としては、著者であるチェスキの背景を考慮する必要がある。チェスキは、その父親同様、インスブルックで領邦君主の官僚として勤務した経験を持ち、『ティロル伯領誌』自体もドイツ語で書かれていることから、ドイツ語系エリートの一人に数えることができる。だが、彼の所領は、ドイツ語系地域ではなく、イタリア語系地域であるヴェルシュ地域にあった。また、一七五四年からは、ヴェルシュ地域の司法・行

政を担当するクライス・アムト（郡庁）の長官を務めていた。しかも前章で見たように、『ティロル伯領誌』は、官僚として収集した情報をまとめた報告書としての性格を持つ。よって、その視野には、彼が行政を担当する地域に居住するイタリア語系住民が、必然的に入ってくることになるのである。

⑱ これは違った傾向を示すのが、ティロル外部からの観察者の見方である。例えば、一七九六年にローラーが出版した領邦誌『ティロルについて』は、『ティロルの山の民 Bergvolk』は、ドイツ人とイタリア人から成り立っている。確かに、彼らは、ドイツで最も高く、最も南に位置する山岳地域に共に居住しており、多くの共通点も持っている。しかし、その思考法や道徳的性格の点では、表面的に一瞥した場合よりも、多くの相違がある」と述べた。Rohler, J., *Über die Tyroler. Ein Beytrag zur Oesterreichischen Völkerkunde*, Wien, 1796 (Neudruck, Bozen, 1985), S. 1. 君主でもあるローゼン世の「ドイツのティロル人」と「ヴェルシュのティロル人」の相違に言及して、Riedmann, “Die deutschen Tyroler aber sind auf ihre Vorurtheile und alten Gebräuche sehr verlesen”, *Betrachtungen Kaiser Josephs II. über Land und Leute von Tirol*, *Veröffentlichungen des Tyroler Landesmuseums Ferdinandum* 70 (1990), S. 240-241. さらに一八世紀末から一九世紀初頭の旅行記の多くは、ドイツ語系住民とイタリア語系住民を比較しながら記述する傾向があった。Reinaler, H., *Aufklärung Absolutismus-Reaktion. Die Geschichte Tirols in der 2. Hälfte des 18. Jahrhunderts*, Wien, 1974, S. 54-56.

⑲ FB 3641/II, S. 8, 10.

⑳ Roschmann, K. A., *Griessschafft Tirol*, S. 2-3.

㉑ Romo, *op. cit.*, pp. 142. イレデントリストが利用した古代やイタリアの人文主義者の作品については、Smauer, *Zentralstaat*, S.

64-71.

- ②③ Wolkenstein, *op. cit.*, S. 61, 65.
- ②③ FB 2092, Fol. 1.
- ②③ Brandis, *op. cit.*, S. 2, 6.
- ②③ Roschmann, K. A., *Tirol*, Teil 1, S. 8.
- ②③ Medick, H., "Grenzziehungen und die Herstellung des politisch-sozialen Raumes. Zur Begriffsgeschichte der Grenzen in der frühen Neuzeit", in: Faber, Naumann (Hg.), *op. cit.*, S. 216-220.
- ②③ Stauber, *Zentralstadt*, S. 71-84, 387-433. 前掲時期の「ティローム」を「エーレンツルグ」に置き、^{②③}佐久間「ナチスによる戦争期のティロームにおける「愛国主義」」「西洋史学」二二二・二二〇〇三年「九一三頁」同「ティロームにおける「地域」」「境界」」二二二・二二一三頁「三三頁」。
- ②③ Roschmann, K. A., *Grafschaft Tirol. An die lehrbegierige Jugend*.
- ②③ *Ibid.*, S. 4.
- ②③ Schennach, M. P., "Der wehrhafte Tiroler. Zu Entstehung,

おわりに

これまでの検討で明らかになったことを、時代別にまとめ直しておこう。

一七世紀の領邦誌の特徴は、以下の三点に要約できる。第一に、領邦誌という分野は、ティロールを他とは異なる一つの「祖国」とする認識を基に成立した。だが第二に、一七世紀の領邦誌作者は、ティロール伯領と両司教領の政治上の「境界」を無視できなかった。一方、言語や民族は、「地域」区分の指標とはなっていない。第三に、この時期の領邦誌は、貴族によって担われており、広範な読者層を想定したものではなかった。

Wandlung und Funktion eines Mythos", *GRSR* 14/2 (2005).

- ②③ FB 2706, Fol. 1-2.
- ②③ FB 2706, Fol. 37.
- ②③ Roschmann, K. A., *Tirol*, S. 10, 11. 以下の表現は、以下の領邦誌に準拠して用いた。Roschmann, A., *Kurze Beschreibung*, S. 6; FB 3641/II, S. 3.
- ②③ Stolz, *Ausbreitung*, Bd. 1, S. 225-227. Stolz の「横断国家」概念の訳語として用いた。Stauber, *Zentralstadt*, S. 120-121.
- ②③ Heiss, "Die ökonomische Schattenregierung Tirols. Zur Rolle des Bonner Merkanthilmagistrates vom 17. bis ins frühe 19. Jh.", *GRSR* 1/1, 1992.
- ②③ Dip.1194/III, S. 151-153.
- ②③ Dip.1194/III, S. 10-11.
- ②③ 一七三九年頃の領邦誌では、ティロールが、防衛と通商に有利な位置にあると描かれていた。FB 3641/II, S. 22-23.

一八世紀の領邦誌に見られる傾向の第一は、ティロール伯領と両司教領の相違が重視されなくなり、かわって、新たな「境界」設定の基準が浮上したことである。君主への報告書として作成された領邦誌の場合、統治・行政に役立つ情報が重視された。そのため、産業や農業において重要な意味を持つ気候や植生が、「地域」区分の指標となった。第二に、ティロールを他と比較したり、より大きな枠組みの中で位置づける視角があらわれた。君主に向けて書かれた領邦誌では、寛大かつ適切な統治が要求される。また、出版された領邦誌の場合は、ティロール外の読者の関心に応えることも重要であった。この結果、ティロールの特徴が強調されるようになったが、そこには、中央集権化に抵抗する諸身分の議論が反映された。代表的なものが、ティロールの地理的位置の特殊性を強調する言説である。「辺境」であることを逆用し、自らの重要性をアピールするこうした主張は、「境界地域」におけるアイデンティティ形成の戦略として、注目に値しよう。

さて、歴史、地理、統計などの複数の分野を包含する領邦誌は、学問の専門分化が進んだ一九世紀後半以降には消滅する。だが、一九世紀前半には、ティロールの民俗学・郷土研究の創始者の一人とされるヴェーバーや、ティロールの官僚であったシュタッフラーが、領邦誌に取り組んでいる。^①そこで最後に、一八世紀の領邦誌にあらわれた「地域」「境界」認識が、ヴェーバーやシュタッフラーの作品において、どのような展開を遂げているのかに言及しておきたい。

ヴェーバーやシュタッフラーは、ティロールを南北に区分し、それぞれに「北ティロール」と「南ティロール」という固有の名称を与えている。これは、一八世紀後半に出現したティロールを南北に区分する考え方を、さらに発展させたものである。とはいえ、気候や植生を指標に、アルプスが南北の「境界」とされるのは、一八世紀後半と同様である。^②既に触れたように、後世の議論では、イタリア側が「境界」としてのアルプスの役割を強調するのに対し、ドイツ側はこれを低く見積もることで、第一次大戦後のティロール分割の不当性を訴えてきた。これを考えれば、ドイツ語系エリートが、一九世紀前半になっても、ブレunnerを「境界」と認識していたことは興味深い。アルプスを「ドイツ」と「イタリア」の「境界」とする考え方が、「イタリア」の政治的「境界」をアルプスにまで広げようとするイレデンティストの運動と

結び付けられ、これに対してドイツ語系エリートが脅威を感じるようになるのは、もう少し後のことだったと考えられる。しかし、一九世紀前半の領邦誌は、「民族」対立が強まりつつあったこともうかがわせる。第一に、一八世紀後半に出現しつつも未だ支配的ではなかった、「ドイツのティロール人」と「イタリアのティロール人」を区別する叙述のパターンが、完全に定着していた。^③しかも、ヴェーバーやシュタッフラーは、一七・一八世紀の領邦誌にはまったく見られなかった「言語境界」という概念を用いることで、「ドイツティロール Deutschtirol」と「イタリアのティロール Italianisches Tirol」を線引きしている。^④

だが第二に、「イタリアのティロール」の存在は認めても、ティロールとは別個の単位と見なすことは断固として否定した。これを示すのが、「トレンティーノ」という名称に対する態度である。この名称は、都市トリエントとその周辺地域、ないしは司教領を指すものであったが、一八世紀末から一九世紀前半の間に、イタリア語系地域を一括する概念として成長した。^⑤これ以降、イタリア語系地域の自治権拡大運動では、「トレンティーノ」が、闘争概念として用いられることとなる。^⑥これに対し、ドイツ語系のヴェーバーとシュタッフラーは、「トレンティーノ」という用語を使うことはなかった。

さらに、ヴェーバーは、ヴェルシュ地域の中都市ロヴェレート（ドイツ的要素）を強調することで、イタリア語系地域の一体性も否定する。^⑦また、シュタッフラーは、「イタリアのティロール人は、ドイツのティロール人同様、その祖国 Vaterland と君主を愛している」と述べている。一七・一八世紀の用法同様、シュタッフラーも、「祖国」をティロールという意味で用いているため、この記述は、イタリア語系住民のティロールに対する帰属意識を強調するものと言える。以上のように、ヴェーバーやシュタッフラーの叙述は、当時のイタリア語系エリートが成長させつつあった独自の「地域」意識を、故意に無視、ないしは過小評価しようとするものだったのである。

① Weber B., *Das Land Tirol Mit einem Anhange: Vorarlberg. Ein Handbuch für Reisende* (以下、*Das Land Tirol*)、2 Bde, Innsbruck, 1837-38; Staffler, J. J., *Tirol und Vorarlberg statistisch und topographisch mit geschichtlichen Bemerkungen* (以下、*Tirol und Vorarlberg*)、2 Teile, Innsbruck, 1839-46.

② ヴェーバーの作品では、第一巻で「北ティロール」、第二巻では「南ティロール」が扱われたが、そこで南北を分けるのは「ブレンナー」であった。また「一八世紀後半の領邦誌同様、植生や農業についての記述で、アルプスの南北を別々に論じている」(Weber, *Das Land Tirol*, Bd. 1, S. 52-53, 66-67, 79-86)。シュタッフラーは「多くの河川の分水嶺となり、領邦を二つの部分に分けている巨大なブレンナーの尾根を目にすれば、迷わず、その北を「北ティロール」、南を「南ティロール」と名づけることになる」とした。ブレンナーを地理的な根拠で「境界」とする見解が、これまでのドイツ語系エリートにおいては一般的でなかったことを考慮すれば、このシュタッフラーの意見は注目に値する。だが、第二に、シュタッフラーは、「より正確な区分を行おうとする場合、気候と優れた果実、特にブドウの産出を、決定的な要因としなければならない」と述べる。さらに、「この後者の区分が、私には最も適当なように思われる」として、気候と植生を他よりも重視する姿勢を表明した。Staffler, *Tirol und Vorarlberg*, Teil 1, S. 99-100.

③ ヴェーバーは、「イタリアのティロール人の特徴」を、「ドイツティロール人」と比較しながら論じた。Weber, *Das Land Tirol*, Bd. 2, S. 498-503。シュタッフラーの場合にも「道徳的・宗教的観点において、明確な区分のメルクマールが、ドイツとイタリアのティロール人を分か」と述べられている。Staffler, *Tirol und Vorarlberg*, Teil 1, S. 147.

④ ヴェーバーは、「言語境界」という言葉自体は使わない。だが、ティロール伯領とかつてのトリエント司教領の間に位置していたサルーンのあたりで言語が変化しており、ここが「ドイツのティロール」と「ヴェルシニョのティロール」の「境界」であると報告する。Weber, *Das Land Tirol*, Bd. 1, S. 92; Bd. 2, S. 475-477。シュタッフラーは、*Tirol und Vorarlberg* を「一八四七年に『ドイツティロールとフォアアルベルク』という題名で再版した」(Staffler, *Das deutsche Tirol und Vorarlberg, topographisch, mit geschichtlichen Bemerkungen*, 2 Bde, Innsbruck, 1847)。この作品では、旧トリエント司教領とヴェルシニョ地域以外を「ドイツティロール」に区分した(Bd. 1, S. 5)。よって、ここでも、サルーンが「境界」となるが、よりはっきりと「サルーンを「言語境界」と呼んでいる箇所もある」(Bd. 2, S. 556)。

⑤ 前章で触れたように、「一八世紀の特に後半になると、イタリア語系エリートが、ドイツ語系地域との相違を自覚し始めた。このこととならんで、「トレンティーノ」概念の成長を促したのが、一八世紀末以降の支配領域の変動である。対仏戦争期に南部からティロールに侵攻したフランス軍は、占領地域の名称として、「トレンティーノ」という用語を採用した。さらに、トリエント司教領が一八〇三年にティロールに併合され、ナポレオン体制下においては、これらの地域をも含むティロールの南部が、イタリア王国に併合された。

⑥ 「トレンティーノ」概念に関しては、Negurito, *op. cit.* を参照。

⑦ 「ロヴェレートの住民は、ドイツとヴェルシニョの末端から成り、その通商活動によって、一つの固有の民族 Volk を形成している。…このため、トリエントとは完全な対照をなす。事業を営む移住者たちによって樹立されたドイツ的要素は、今日でも際立っており、住民たちはそれを恥じるどころか、イタリアの優雅さによって洗練しようとしてみている。彼らはドイツの言語と文学を愛し、それらを習得してい

9] Weber, *Das Land Tyrol*, Bd. 2, S. 587.

⑧ Staffler, *Tyrol und Vorarlberg* Teil I, S. 151.

del profilo istituzionale dell'amministrazione locale dello stato visconteo.

Le attività dei vicari al di fuori delle norme statutarie sono riscontrabili nelle corrispondenze con il referendario. Le loro lettere delineano una sostanziale debolezza dell'autorità e del potere del vicario nei confronti delle società e degli uomini locali, che, trovandosi in mezzo ai conflitti fazionali, disponevano dei rapporti di alleanza fazionale e di una buona possibilità di sfruttare le loro forze armate. Tale debolezza diede luogo sia alla libera definizione della natura del rapporto tra lo stato e gli uomini del posto, in cui esso è interpretato in termini di "protezione e difesa", che all'inquadramento degli elementi dello stato visconteo nei contesti locali come mezzi di legittimazione dei microconflitti locali.

Quindi nel percorso d'inserimento del vicario e del vicariato nella società locale di Bergamo qui esaminato, si riscontra un largo spazio per le iniziative locali e lo sviluppo istituzionale dello stato che andarono di pari passo, formando un stretto rapporto di interazione tra essi.

Die Wahrnehmungen der „Region“ und der
„Grenze“ bei deutschsprachigen Eliten Tirols im 17.
und 18. Jahrhundert

von

SAKUMA Daisuke

Viele der bisherigen Regionalismusforschungen gehen davon aus, dass eine „Region“ über eine ethnisch, historisch-kulturell homogene territoriale Einheit verfügt. Das Territorium Tirols überschritt jedoch den Alpenhauptkamm und deren Bevölkerung bestand aus der deutschsprachigen Majorität und der italienischsprachigen Minorität. Die Hochstifte Trient und Brixen waren vor 1803 mit der Grafschaft Tirol nicht vereinigt. Wie nahmen eigentlich die deutschsprachigen Eliten Tirols eine „Region“ und eine „Grenze“ wahr? Um dies zu beleuchten, habe ich Landesbeschreibungen im 17. und 18. Jahrhundert zum Gegenstand meiner Betrachtungen gewählt.

Die Entstehung der Landesbeschreibung setzt eine Denkart, die das Land als die sich von anderen Gebieten zu unterscheidende Einheit betrachtet, voraus. Verfolgt man die Inhalte der Landesbeschreibungen, jedoch so wird deutlich, dass „Grenzen“ oder Vielfältigkeiten innerhalb Tirols auch erkannt wurden. Für die Verfasser im 17.

Jahrhundert waren die herrschaftlichen Grenzl意思ien zwischen der Grafschaft Tirol und den beiden Hochstiften am wichtigsten. Die meisten Schriften des 17. Jahrhunderts erwähnten zwar, dass die beiden Hochstifte „under dem schutz und schirmb der grafschaft Tyroll“ standen. Es war doch üblich, dass die Hochstifte in eigenen Teilen dargestellt wurden. Auf der anderen Seite gab es zu jener Zeit keine Denkart, nach Sprache oder Charakter des Volkes eine „Region“ abzugrenzen.

Die Beschreibungen des 18. Jahrhunderts behandelten die Hochstifte nicht mehr in eigenen Teilen. Die Eliten zu jener Zeit sahen also die Hochstifte nur als Teil Tirols. Stattdessen vermehrten sich seit der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts die Erwähnungen über die Unterschiede der Volkscharaktere oder Sprachen. Allerdings waren solche Darlegungen in den Arbeiten der deutschsprachigen Eliten noch nicht üblich. Nach den Forschungen von R. Stauber war es für die italienischsprachigen Eliten ein großes Problem, dass ihr Territorium zu Tirol und zum Heiligen Römischen Reich gehörte, obwohl sie sich im italienischen Kulturraum heimisch fühlten. Dagegen gab es keines solches Problem oder Dilemma bei deutschsprachigen Eliten. Sie mussten nicht mit Unstimmigkeit von politischer und kultureller Zugehörigkeit konfrontiert werden. Was war dann das wichtige Kriterium der Trennung für die deutschsprachigen Eliten? Hier ist zu bemerken, dass die Landesbeschreibungen des 18. Jahrhunderts durch statistische Darstellungen charakterisiert sind. Im 18. Jahrhundert entwickelten sich die Statistik und die Kameralwissenschaft. Die Gelehrten und die Beamten zu jener Zeit hatten daran großes Interesse, die Bevölkerung, die Fruchtbarkeit, die Industrie, das Einkommen des Landes usw. genauer zu erfassen. Aus diesem Grund unterschieden viele der Verfasser nach Klima oder Fruchtbarkeit den nördlichen von dem südlichen Teil des Landes. Dabei wird die Wasserscheide der Alpen, der Brenner, als die Grenze wahrgenommen.

Bei der Untersuchung der Wahrnehmungen der „Region“ und der „Grenze“ soll auch berücksichtigt werden, wie die deutschsprachigen Eliten das Land Tirol in den weiteren Rahmen wie „Deutschland“ oder Habsburgermonarchie betrachteten. Für die Autoren der Landesbeschreibungen im 17. und 18. Jahrhundert war es klar und selbstverständlich, dass Tirol ein Teil „Deutschlands“ war. Allerdings wurden die Argumente, Tirol mit anderen Ländern zu vergleichen oder die Besonderheiten Tirols zu betonen, im 17. Jahrhundert noch nicht entwickelt. Zudem war von der Zugehörigkeit Tirols zur Habsburgermonarchie noch keine Rede. Auf der anderen Seite kann man die Erwähnungen über die Zusammenhänge mit anderen habsburgischen Ländern in Landesbeschreibungen des 18. Jahrhunderts finden. Zugleich soll nicht übersehen werden, dass die Autoren die Sonderstellung Tirols in „Deutschland“ oder in der Habsburgermonarchie betonten. Hier sind die Ausdrücke interessant, mit denen Tirol ausgezeichnet wurde: „das Herz von Österreich“, eine

„Citadelle aller Österreichischen Erbländen“ und „den Schlüssel zu Teutsch- und Welschland“. Die Verwendung von diesen Wörtern hatte folgende drei Gründe. Erstens sollten diese Aussage, wie M. P. Schennach neulich gezeigt hat, die Selbstverteidigungsfähigkeit und die militärischen Leistungen der Tiroler gegen die Bestrebungen der Wiener Zentralstellen zur Nivellierung des Tiroler Landesverteidigungswesens untermauern. Zweitens wurden diese Wörter als einer der Gründe dafür angegeben, warum die Habsburgermonarchen Tirol sich von anderen Erbländern unterschieden und die Landesfreiheiten und Privilegien bestätigten. Drittens hingen diese Diskurse mit den wirtschaftspolitischen Fragen zusammen. Die Tiroler beschwerten sich über die kameralistisch inspirierten Maßnahmen zur Gewerbeförderung und die zollpolitischen Vereinheitlichung der Monarchie in der theresianisch-josephinischen Epoche. Deswegen verwendeten die Schriften im 18. Jahrhundert die Ausdrücke „Schlüssel zu Teutsch- und Welschland“ und „das Herz von Österreich“, um die Sonderstellung Tirols als Transitroute herauszustellen.